東海救急看護研究会活動報告

東海救急看護研究会
明　石　惠　子（名古屋市立大学看護学部）
伊　藤　稔　子（岐阜大学医学部附属病院）
小　倉　久美子（名古屋掖済会病院）
笠　原　真　弓（浜松医療センター）
山　口　弘　子（名古屋大学医学部附属病院）
森　木　ゆう子（摂南大学看護学部）
臼　井　千　津（愛知医科大学看護学部）
大　原　美　佳（三重大学医学部附属病院）
奥　田　晃　子（名古屋第二赤十字病院）
角　　由美子（名古屋第二赤十字病院）
前　田　貴　彦（三重県立看護大学看護学部）

1．東海救急看護研究会設立の経緯

東海救急看護研究会（本研究会）は、2009年５月、東海地方の救急看護に関心のあるメンバーが集まって設立された。そのメンバーは、すべて2008年11月に開催された第10回日本救急看護学会学術集会（学術集会長：明石惠子）の企画委員であった。その企画委員会が組織された当初は初対面のメンバーも多かったが、約１年半におよぶ学術集会の企画・運営を通して信頼関係が形成された。そして、学術集会終了後、このメンバーで救急看護の研究会を開催したい、という声が複数のメンバーから聞かれていた。一方で、学術集会に教育講演やコメンテーターとしてご協力いただいた稲葉一人氏（中京大学法科大学院・教授）と大下大圓氏（飛騨千光寺・住職）が救急看護におけるさまざまな問題に関心を持ってくださっていることがわかり、私たちの研究会への協力をお願いすると、それぞれ快諾してくださった。

このような経緯で誕生した本研究会は、発起人９名で第１回実行委員会を2009年５月28日に開催した。発起人は愛知、岐阜、三重、静岡の救急医療現場で活躍している看護師または救急看護を教授している教員であった。実行委員会では、最初に本研究会の目指すところを検討し、救急医療場面で生じる倫理的問題、法的問題、心の問題に焦点を当てることとした。そして企画書（**表１**）を作成し、少人数グループによる事例検討会を主とする活動を開始した。

本研究会の活動成果は後述するが、第１回研究会への参加者数は私たちの予想を超えていた。また、本研究会が取り上げた救急医療場面における倫理や社会的な問題に苦慮している看護師が多く、このような研究会開催への期待が大きいことを実感した。そこで、救急看護における社会的問題の探求と救急看護師の教育方法の開発が必要であると考え、「救急医療の社会的・倫理的問題への対応能力向上に向けた救急看護師教育システムの開発」をテーマとして科学研究費に応募することとした。これが2010～2012年挑戦的萌芽研究として採択され、さらに活動が広がった。その後、実行委員も増員し、現在

表１　東海救急看護研究会企画書（抜粋）

1.趣旨
救急医療の現場は、倫理的問題や法的問題にさらされることが多い。医療行為に対する患者の意思が確認できない、傷病者の尊厳やプライバシー保護が侵される、救急患者の搬送を断らざるを得ないなど、救急医療に携わる者は、様々な問題に直面している。また、そのような場面では、心の問題も発生しやすい。そこで本研究会は、救急医療現場で生じる諸問題を通して、救急医療に関する知識を高め、実践につなげる方略を検討することを趣旨とする。
本研究会には、看護職、医師、救急救命士など、救急医療に携わる者であれば誰でも参加可能である。そしてアドバイザーを招いて、参加者とともに実践に即した学習や議論を行う予定である。

2.メンバー
参加者：救急医療における倫理的問題、法的問題、心の問題に関心のある者
アドバイザー：稲葉一人氏（中京大学法科大学院　教授）
大下大圓氏（飛騨千光寺　住職）

3.研究会の内容
学習目標：救急医療場面で生じる倫理的問題、法的問題、心の問題への対処方法が理解できる。
内容：救急医療における倫理や法律、心のケアに関連する基本的な知識の学習および事例検討

4. 研究会の開催方法
開催回数：3回／年
開催時間：平日18:30-20:00　または　土曜日14:00-16:00
場所：参加者の所属する施設の会議室等（会場費不要の場所を選択）
出席者に対する公平性を考慮して愛知、岐阜、三重、静岡で順次開催
方法：実行委員による企画・実施（輪番）

18名の実行委員が研究会の企画・運営に携わっている。

2．東海救急看護研究会の実績

これまでに10回の研究会を開催した（**表２**）。うち５回は学術集会での開催（日本救急看護学会３回、救急医学会中部地方会２回）であった。参加者はのべ400人以上であり、複数回参加している者もいる。東海地域および学術集会における本研究会の開催は周知されつつある。

本研究会でこれまでに検討したテーマは、小児虐待、蘇生処置の拒否、緊急手術や治療における代理意思決定、自殺企図患者、心肺停止患者の家族などであった。通常、研究会開催の２ヶ月以上前に実行委員会を開催し、検討事例を決め、議論のテーマや方法などを話し合っている。研究会当日は、最初に事例紹介を５分程度で行い、その後、６－10人のグループにファシリテーターを１名配置してテーマに沿って議論を進める。このファシリテーターは、本研究会のメンバーが担当するが、グループ数が多いときは、参加している急性・重症患者看護専門看護師や救急看護認定看護師に議論のテーマを伝えて、協力を依頼することもある。グループでの議論後、それぞれの議論内容を発表してもらい、最後にコメンテーターが専門的な立場で、事例に対する考え方や対応上の留意事項などを解説する。

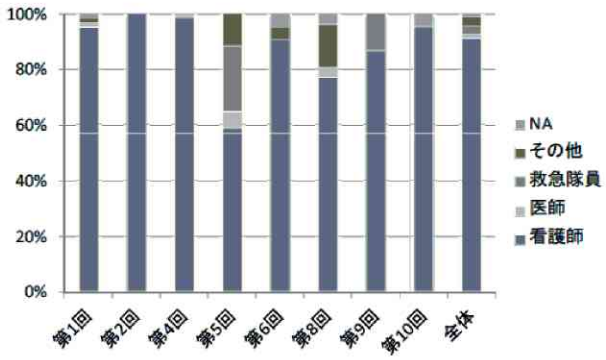

図１　参加者の所属

3．東海救急看護研究会の評価

本研究会の成果やあり方を検討するため、参加者を対象とした無記名による質問紙調査を行った。質問項目は、参加者の背景（職種、年代、所属）、本研究会への参加動機、今後の仕事への有用性、倫理的対応能力向上への有用性、本研究会の運営方法、本研究会への希望などである。質問紙は、研究会開始時に配布し、終了後に回収した。なお、研究会参加者には、調査の目的と質問紙への無記名による回答・提出によって調査への同意を得たものとする旨を口頭で説明し、協力を依頼した。

これまでに開催した10回の研究会への参加者はのべ424人であり、そのうち343名（80.9%）から回答を得た。なお、第３回研究会は、参加者が少なかったため質問紙調査を実施しなかった。

回答者の職業は看護師312名（91.0%）、医師６名（1.7%）、救急隊員10名（2.9%）、その他10名（2.9%）であった（**図１**）。ほとんどが看護師であったが、救急医学会地方会では医師や救急隊員の参加があり、小児虐待

表２　東海救急看護研究会　開催概要

回	開催日時	テーマ／検討事例	コメンテーター・講師・シンポジスト	参加者数	実行委員	開催場所
1	2009年9月7日（月）18:30-20:00	小児のネグレクト	稲葉一人氏	66	7	名古屋市立大学看護学部
		高齢者のDNAR				
2	2010年2月6日（土）14:00-16:00	「輸血免責同意書」と緊急手術	稲葉一人氏	36	6	名古屋市立大学看護学部
		離院患者とその家族への対応				
3	2010年6月12日（土）11:00-15:30	講演：救急看護における心のケア	大下大圓氏	16	9	飛騨千光寺
		CPA患者の家族のこころのケア	大下大圓氏			
4	2010年10月29日（土）10:15-11:45	モラルハラスメントを受け自殺企図で救急搬送された高齢患者	大下大圓氏	82	10	第12回日本救急看護学会学術集会（東京）
5	2010年11月7日（日）13:20-14:20	救急要請を繰り返した後に自殺企図に至った患者		38	11	第12回日本救急医学会中部地方会（愛知）
6	2011年2月5日（土）14:00-16:00	急性心筋梗塞により重症心不全患者の治療に対する意思決定	稲葉一人氏	24	8	名古屋市立大学看護学部
7	2011年10月21日（金）14:50-16:20	自殺企図の患者が帰宅する際の対応	稲葉一人氏	59	14	第13回日本救急看護学会学術集会（神戸）
8	2012年3月3日（土）13:00-16:30	シンポジウム：救急外来で出会う小児虐待への対応	髙村淳子氏（MSW） 大山美華氏（小児救急看護認定看護師） 今井寛氏（救命救急センター長） 稲葉一人氏（法律家）	34	16	三重大学医学部付属病院
		救急外来で虐待が疑われ対応に苦慮した事例	稲葉一人氏			
9	2012年10月13日（土）9:00-10:30	治療の意思確認ができない救急患者の終末期ケア	大下大圓氏	20	10	第15回日本救急医学会中部地方会（愛知）
10	2012年11月2日（金）14:00-15:00	緊急手術・治療の継続を望まない急性腹部大動脈閉鎖患者の家族	稲葉一人氏	49	14	第14回日本救急看護学会学術集会（東京）

をテーマとした研究会では児童相談所職員、メディカルソーシャルワーカーなどの参加もあった。また、回答者の年代は、20歳代45名（13.1%）、30歳代160名（46/6%）、40歳代96名（28.0%）、50歳代以上31名（3.2%）であり、中堅層以上の参加が多かった（**図２**）。回答者の所属は、救急外来・外来141名（41.1%）、集中治療室等118名（34.4%）、病棟35名（10.2%）、その他51名（14.9%）であった（**図３**）。

本研究会への参加動機は、レベルアップ196名（57.1%）、意見交換92名（26.8%）、疑問の解決50名（14.6%）などであった（複数回答、**図４**）。

今後の仕事への有用性は４段階（そう思う、どちらかといえばそう思う、どちらかといえばそう思わない、そう思わない）で質問した。その結果、そう思う269名（78.4%）、どちらかといえばそう思う62名（18.1%）、どちらかといえばそう思わない５名（1.5%）、そう思わない３名（0.9%）であり、ほとんどの者が今後の仕事に活用できると回答した（**図５**）。

倫理的対応能力向上への有用性については、第４、５、７、９、10回の研究会の参加者への質問として設定し、4段階（そう思う、どちらかといえばそう思う、どちらかといえばそう思わない、そう思わない）で質問した。回答者数は204名であり、そう思う171名（83.8%）、どちらかといえばそう思う32名（15.7%）、どちらかといえばそう思わない１名（0.5%）であり、ほとんどの者がこのような研究会が看護師の倫理的問題への対応能力向上に有用であると回答した（**図６**）。

本研究会の運営方法については、４段階（よかった、どちらかといえばよかった、どちらかといえばよくなかった、よくなかった）で質問した。その結果、よかった238名（69.4%）、どちらかといえばよかった85名（24.8%）、どちらかといえばよくなかった15名（4.4%）であった（**図７**）。ほとんど肯定的な意見ではあるが、運営方法には工夫が必要である。

また、本研究会への希望についての自由記述欄には、「他施設の人・他職種の意見を聞くことができて参考になった」、「事例をグループで検討しわかりやすかった」、

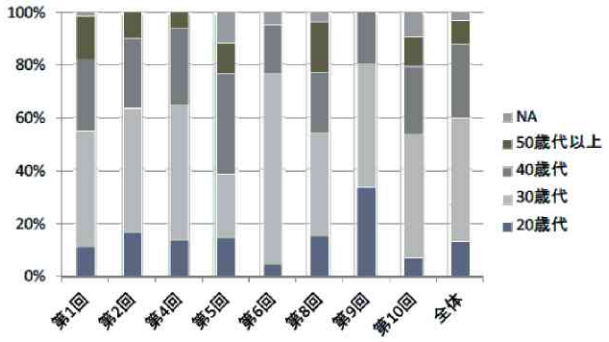

図２　参加者の年代

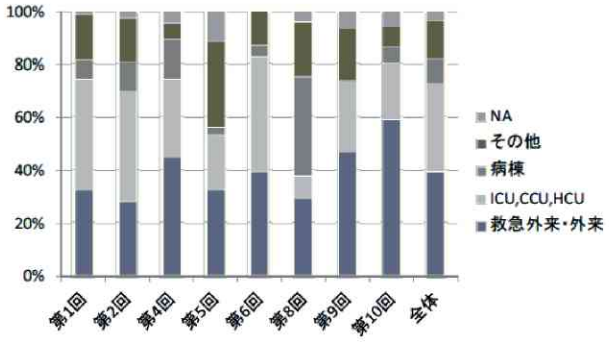

図３　参加者の所属

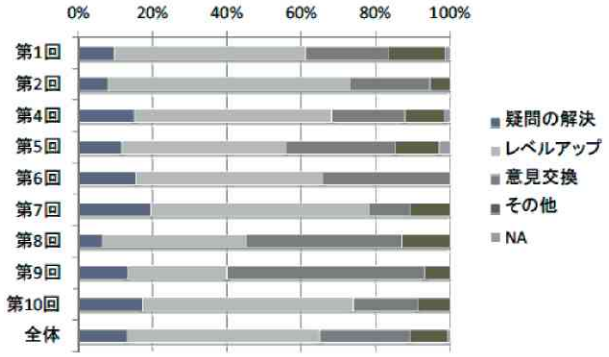

図４　研究会への参加動機

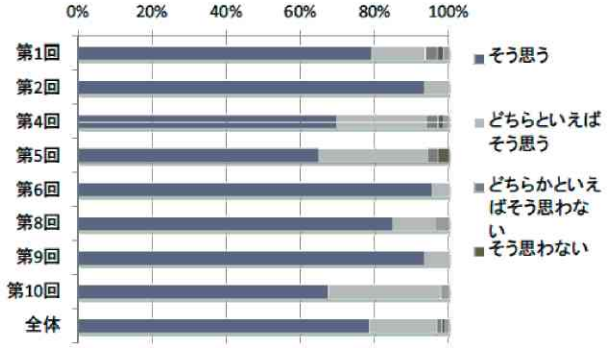

図５　今後の仕事への有用性

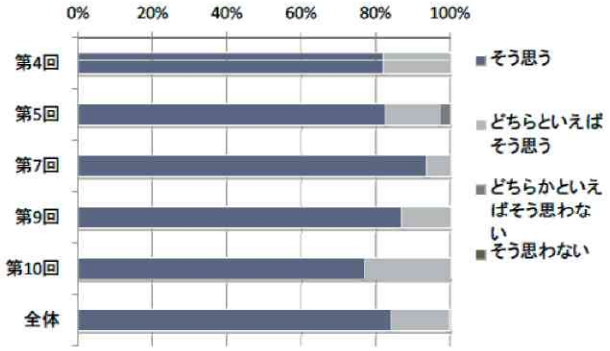

図６　倫理的対応能力向上への有用性

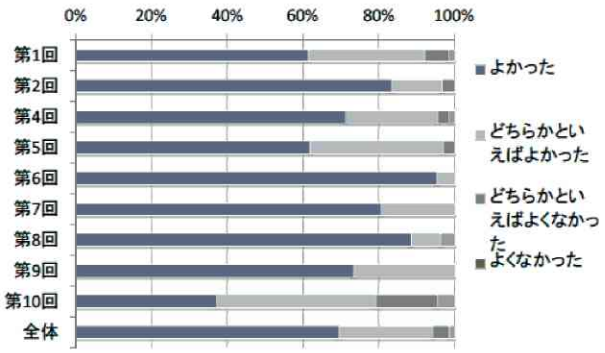

図７　本研究会の運営方法

「類似した状況が多々あるので、今後に生かせる」、「アドバイザーの助言がわかりやすかった」、「検討の時間が短かった」、「検討のテーマを具体的に示した方が良い」など多くの記述があった。

４．「救急医療の社会的・倫理的問題への対応能力向上に向けた救急看護師教育システムの開発」への取り組み

第３回から第10回までの研究会は、科学研究費補助金（挑戦的萌芽）による研究の一環として行われ、その成果をもとに救急看護師教育システムを検討しているところである。その一方で、2010年には、救急医療を取り巻く社会的・倫理的な問題の実態を明らかにし、その対応策を検討することを目的とした実態調査を実施した。

この実態調査は、全国の救急医療施設の看護部門責任者および消防署で救急活動に従事している救急救命士を対象とした調査である。その結果、看護師も、救急救命士も、半数以上が救急医療現場で社会的・倫理的な問題に直面し、ストレスを感じている実態が明らかになった。そして、問題発生時の体制の整備、問題への対応方法の学習機会提供などの必要性が示唆された[1－4]。

５．今後の課題

これまでに開催した10回の研究会とその参加者を対象としたアンケート結果から、救急医療の現場で生じる倫理的問題、法的問題、心の問題について、事例を通して学ぶという本研究会の方略は、参加者にとって有意義であることが判明した。また、このような研究会の必要性も明らかになった。しかし、救急医療の現場では、社会的な問題や倫理的な問題への対応に苦慮している実態がある。そのため、まず、救急医療現場の状況に即した研究会を継続していく必要がある。また、多職種が集まる事例検討会に対する満足感は高いが、多様な勤務形態のなかで参加が限られるという問題もあるため、情報通信技術（Information and Communication Technology：ICT）を活用した研究会の開催を検討したいと考えている。

写真１　第１回研究会
（2009年９月７日・名古屋市立大学看護学部）

写真２　第３回研究会（2010年6月12日・飛騨千光寺）

写真３　第７回研究会
（2011年10月21日・日本救急看護学会学術集会）

文　献

1）前田貴彦，上杉佑也，明石惠子，臼井千津，大原美佳，奥田晃子，佐藤ゆかり，角由美子，森木ゆう子：救急看護師教育システム開発に必要な救急隊との連携－社会的・倫理的問題に対する救急隊の認識と現状－，第13回日本救急看護学会学術集会，神戸市，2011

2）上杉佑也，前田貴彦，明石惠子，臼井千津，大原美佳，奥田晃子，佐藤ゆかり，角由美子，森木ゆう子：救急看護師教育システム開発に必要な救急隊との連携－社会的・倫理的問題に対する救急隊の対応と教育－，第13回日本救急看護学会学術集会，神戸市，2011

3）鈴木里美，太田有亮，稲波泰介，臼井千津，前田貴彦，森木ゆう子，明石惠子：救急医療の社会的・倫理的問題及びクレームに対する看護師の認識と対応の現状（その１），第13回日本救急看護学会学術集会、神戸市，2011

4）鈴木里美，太田有亮，稲波泰介，臼井千津，前田貴彦，森木ゆう子，明石惠子：救急医療の社会的・倫理的問題及びクレームに対する看護師の認識と対応の現状（その２），第13回日本救急看護学会学術集会，神戸市，2011